

やすながじょう  
**安永城跡二之丸**

-民間の牛舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-

2019年3月

宮崎県都城市教育委員会







## 序 文

本書は、平成30年度に民間の牛舎建設に伴って発掘調査を実施した安永城跡二之丸の埋蔵文化財発掘調査報告書です。発掘調査では、中世を中心とした遺構・遺物が見つかりました。

特に、まとまって検出された遺構群は、安永城跡二之丸の様相を知るための貴重な手掛かりであります。これら先人の残した文化財を守り引き継いでいくことは、私たち都城市民の責務でもあります。本書を通して、こうした地域の歴史、文化財に対する理解と認識がますます深まる事を願いますとともに、調査で明らかとなつた成果が、今後の学術研究発展に少しでも寄与できれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査から本書刊行に至るまで御協力いただいた株式会社イケダデーリィファーム様をはじめ、市民の皆様、関係各機関に心から感謝申し上げます。

2019年3月

都城市教育委員会  
教育長 児玉 靖男

## 例 言

1. 本書は民間の牛舎建設に伴い、発掘調査した安永城跡二之丸の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は都城市教育委員会が主体となって、同文化財課主任加賀淳一、同嘱託外山亜紀子が担当した。
3. 本書に使用したレベル数値は海拔絶対高で、基準方位は座標北（G.N）である。使用した座標数値は国土座標（世界測地系）に基づいている。
4. 本書の遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・写真の番号は一致する。
5. 土層と遺物の色調は「新版標準土色帳」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。
6. 現場における遺構の実測は作業員の協力を得て加賀、外山が中心となってこれを行った。
7. 遺構の写真撮影は加賀が行った。ドローンによる空中写真撮影は文化財課主任主事中園剛史、同嘱託早瀬航が行った。
8. 本書に掲載した遺構のトレーはAdobe「Illustrator CS5」を用いて加賀、外山が行った。遺物の実測・トレーは整理作業員の協力を得て加賀、外山が行った。
9. 本書に掲載した遺物の写真撮影は加賀が行った。
10. 本書の執筆・編集は加賀が行った。
11. 本書中における遺構略記号についてはそれぞれ、掘立柱建物跡＝「SB」、土坑＝「SC」、溝状遺構＝「SD」とし検出順に通し番号を付している。
12. 本書中における各遺物のスケールは、原則として土器・石器は1/3、石器のうち、小型・大型の製品以外は1/3を基本としている。また、石器の微細な剥片、敲打（使用）痕については、その範囲を破線で図示している。
13. 発掘調査で出土した遺物と全ての記録（図面・写真など）は都城市教育委員会で保管している。

## 目 次

### 本文目次

第1章	序	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査組織	1
第2章	遺跡の位置と環境	1
第1節	地理的環境	1
第2節	歴史的環境	1
第3節	安永城跡の沿革と各曲輪の概要	3
第3章	調査の成果	7
第1節	発掘調査の方法と概要	7
第2節	基本土層	10
第3節	中世の遺構と遺物	10
第4節	その他の遺物	12
第4章	調査まとめ	15

### 挿図目次

第1図	安永城跡と周辺の遺跡	2
第2図	安永城跡構築図	5
第3図	安永城古絵図	5
第4図	安永城全体図	6
第5図	安永城トレシチ配置図	8
第6図	確認調査トレシチ平面断面図	9
第7図	確認調査トレシチ平面断面図②	10
第8図	土層模式図	10
第9図	遺構配置図	11
第10図	掘立柱建物跡断面図	13
第11図	SC1実測図	13
第12図	安永城跡二之丸出土遺物	14

### 挿表目次

第1表	遺物観察表（土器・土師器・陶器）	12
第2表	遺物観察表（石器・石製品・金銀製品・土製品）	12
写真図版1		16
写真図版2		17
写真図版3		18
写真図版4		19
写真図版5		20

### 図版目次

## 第1章 序

### 第1節 調査に至る経緯

平成30年3月23日付で株式会社イケダデーリファーム（以下、事業者）より、都城市庄内町13286ほかにおける文化財所在の有無について照会がなされた。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「安永城跡（遺跡番号：M8047）」二之丸に位置していた。また、当該地における開発計画は、新牛舎建設に伴う崖地掘削であり、二之丸曲輪の一部を削平するものであった。

これを受けて、都城市教育委員会文化財課は事前の確認調査を平成30年4月16日から5月1日にかけて実施した。確認調査は曲輪の西半約1023m<sup>2</sup>を対象として実施した。確認調査面積は55m<sup>2</sup>である。調査の結果、対象地は、表土以下霧島御池石斜面上まで大きく推乱を受けているものの、同層に掘り込まれた中世の遺構（ピット、土坑、溝状遺構）は残存していることが明らかとなった。

上記の結果を受けて、事業者と文化財課は遺跡の取扱いについて協議を重ね、6月27日には工事予定箇所の再確認調査も実施した。この結果、工事は既に進行中でもあり、遺跡の破壊は免れないことから、記録保存のための本發掘調査を実施することで合意した。その後も協議を重ね、事業者と都城市は平成30年10月10日付で「安永城跡における埋蔵文化財の取扱い等に関する協定」を結び、発掘調査を都城市が受託すること、調査に係る委託料は事業者の負担とすることが取り決められた。また、同日付で本發掘調査、報告書作成に係る業務委託契約も締結した。

今回の工事による崖地後退のための崖削削の面積は287m<sup>2</sup>であるが、崖地端部であることから、調査に際しては作業安全確保も必要となった。そのため、これを目的とした作業安全帯を設け、さらに崖際より後退させた位置に限定する形で調査区を設定した。最終的な調査面積は約98m<sup>2</sup>である。現地における発掘調査は、平成30年10月24日に開始し、11月7日に終了した（実調査日数12日）。調査終了後は速やかに発掘調査報告書作成業務に移行し、平成31年3月に完了した。

なお、本報告書中における「安永城跡」の呼称については、本丸、二之丸、金石城、取添の主要曲輪に加え、遠堀（遠構）も含めた絶構えの範囲を指すこととし、各曲輪については、古絵図等に基づき、「本丸（内城）」、「二之丸」と呼称することとする。

### 第2節 調査組織

平成30年度（確認調査・本発掘調査・報告書作成）

・調査主体者	宮崎県都城市教育委員会
・調査事務局	教 育 長 児玉 晴男 教 育 部 長 栗山 一孝 文 化 財 課 長 武田 浩明 文 化 財 課 勤 課 長 梁 煙 光博
・調査報告書担当	文 化 財 課 主査 加賀 淳一

文化財課嘱託 外山亜紀子

発掘作業従事者 段秀敏 内村康彦 花吉節 上野幸一

整理作業従事者 水光弘子 内村ゆかり

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境（第1図）

宮崎県都城市は県南部に位置しており、鹿児島県と隣接する自治体である。人口は約16万5千人を数え、市域面積約650平方キロメートルを測る。人口、面積ともに本県第2の市となっている。今回発掘調査を実施した安永城跡は都城市庄内町に位置している。庄内町は、行政エリアの中を見ると、当市西部の主要居住地域にある。エリア内には、霧島方面へのアクセス道路となる都城霧島公園線が走行しており、この道路の両側に住宅、商業地、医療施設等の市街地が形成されている。この市街地を中心として周辺には田畠や山林が広がる田園地帯となっている。

安永城跡は、庄内川左岸のシラス台地上に造られており、周辺には河川により開析されたシラス台地が発達している。この台地は霧島連山方向から延びてくる谷が放射状に侵食しており、台地面を複雑に入り組んでいる。また、それぞれの谷には小規模な川が流れおり、庄内川へと注ぎ込んでいる。

安永城跡はこれらの中でも主要台地のひとつである諒訪原台地の独立丘陵端部に造られており、本来舌状に延びていた台地を分割して曲輪群を形成している。主要曲輪の立地する台地は南北約550m、東西約600mの不整形形の形状を呈している。台地の南西下には、侵食谷の谷頭から流れ込む小河川（小田川）が流れしており、これが城域と城外を分断する天然の要害となっている。

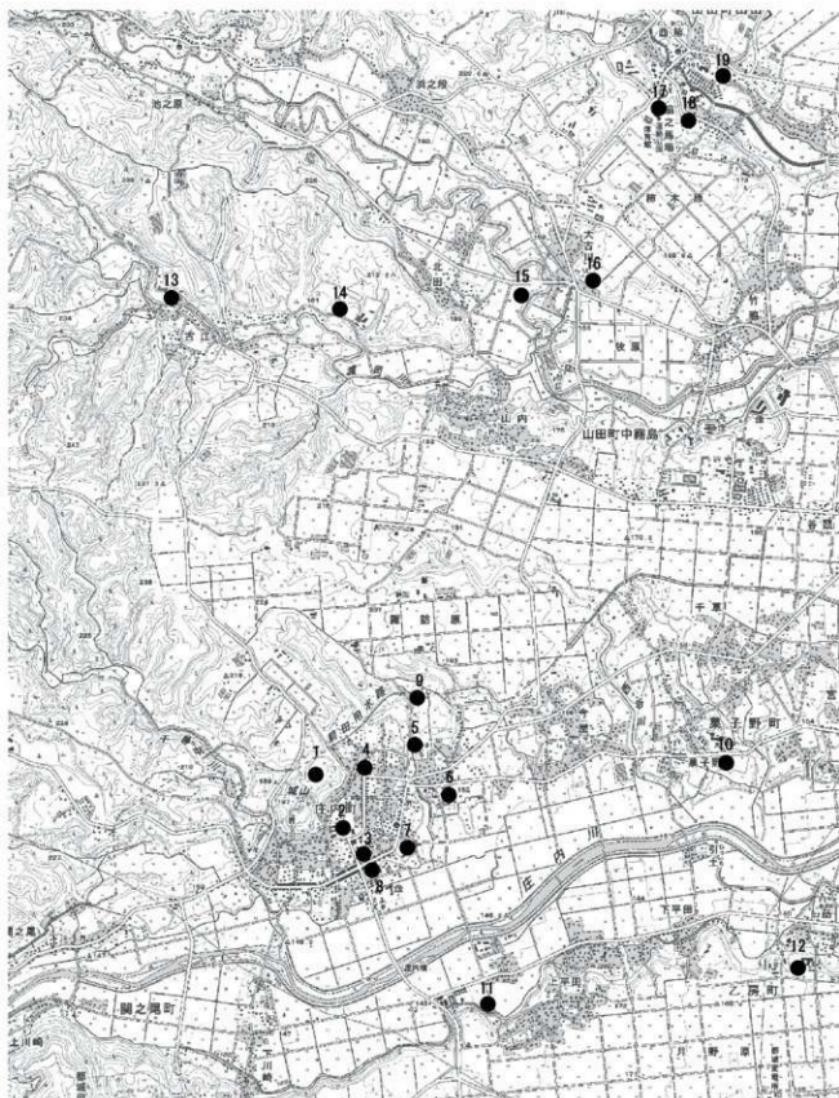
今回調査した二之丸は、分断された台地のひとつであり、規模は南北約250m、東西約300mを測る。現在、西側の一部は大きく削平されていることから、本来はこれ以上の規模をもっていたことは明らかである。旧地形図や空中写真等を参照すると、これまでに削平された面積は、約2500m<sup>2</sup>と推定される。

安永城跡二之丸の標高は曲輪台地面が概ね約195m、台地面下との比高は約30mを測る。安永城跡と庄内川の間に複数の段丘面が広がっており、現在、居住地域となっている。

### 第2節 歴史的環境（第1図）

庄内地区では、これまで複数の遺跡が調査されており、ここでは、安永城跡周辺の遺跡について時系列的に取り上げながらその概要について報告する。

まず、安永城の北に位置する池増遺跡では、細石刃を主体とする後期旧石器時代の遺跡が見つかっている。当市における旧石器時代遺跡調査例は少なく、稀少な事例である。



- 1: 安永城跡
- 2: 庄内小学校遺跡・安永地蔵假里跡
- 3: 庄内西牆遺跡・釣こう院跡
- 4: 山久院跡
- 5: 謙訪神社
- 6: 泰原遺跡
- 7: 頤心寺
- 8: 田持水家住宅
- 9: 前田用水路
- 10: 葉子野地下式横穴墓群
- 11: 平田かくれ念仏洞
- 12: 大久保第2遺跡
- 13: 繩場追船跡
- 14: 沖堀遺跡
- 15: 面ヶ田・大吉川古戰場
- 16: 大吉川かくれ念仏洞
- 17: 山田城跡
- 18: 種子島家臣追達塔
- 19: 良谷原の墓

第1図 安永城跡と周辺の遺跡 (\$=1/20000)

縄文時代の遺跡は幾つかの調査事例があり、丸山第1遺跡では縄文時代早期の集石遺構が検出されている。また、安永城跡より西に位置する伊勢谷第1遺跡では、縄文時代早期、中期の遺物が出土している。このほか、金石城跡から縄文時代後晩期の遺物が出土しているほか、庄内西脇遺跡において縄文時代後期の遺物が出土している。

安永城跡のすぐ下に位置する庄内小学校遺跡や桑原遺跡において、弥生時代中期の土器片が出土している。集落の存在を伺わせるが当該期の造構は検出されていない。

大久保第2遺跡は庄内川右岸のシラス台地北縁辺部に位置している。弥生時代終末期の集落跡が見つかっており、堅穴建物跡4棟、周溝状造構1基が検出されている。

古墳時代の遺跡としては、安永城跡の東に位置する葉子野地下式横穴墓群が挙げられる。各種開発や玄室天井崩落に伴う緊急発掘調査を含め、これまでに約20基の地下式横穴墓が検出されている。築造時期は5世紀中葉から6世紀前葉にかけてとみられる。副葬品は鐵鏃等の鉄器を伴うものが多いが、貝貞、鐵鐸を持つものがあり、当時の外來系遺物の流通を検討する上でも重要な事例となっている。

古代の遺跡として、庄内西脇遺跡で、平安時代後期の掘立柱建物跡および土師器が出土している。ここからは鍛冶遺構が検出されており、当該期の小鍛冶が行われていたことが明らかとなっている。このほか桑原遺跡でも平安時代の遺物が出土している。

中世の遺跡として、まず特筆すべきは安永城跡の北に位置する薩摩追跡がある。都城島津氏初代北郷資忠が文和元年（1352）に足利將軍家から島津莊日向方北郷300町を賜り、同地に居館を構えたとされる場所である。平成22年（2010）に縄張り調査・確認調査を実施しており、館範囲等が明らかとなっている。

今回調査した安永城跡は後述するように、応仁2年（1468）の築城とされる。周辺には中世後期の集落も存在しているものと推察されるが、現在のところ調査事例は無い。また、安永城跡の北には南北朝期、正平14年（1359）に相直定頼によって築城されたとされる山田城跡がある。役場等の建設により大きく破壊され、曲輪の大半は失われている。

山久院跡は、安永城跡下にあり、はじめ北郷資忠の菩提寺として薩摩追跡に建てられ、後に移されたとされる。明治時代の廃仏毀釈により廃寺となっている。

江戸時代以降の遺跡としては、庄内小学校遺跡があり、近世～近代の掘立柱建物跡が検出されている。平田かくれ念仏洞は、庄内川右岸の成層シラス台地北縁据部に穿たれた洞窟で、近世期に薩摩藩が禁制とした一向宗が密かに信仰されていたことを示す遺跡である。

明治維新後、庄内地区は、近代的に発展していく。その先駆をつけたのが、明治2年（1869）、都城地頭として赴任した三島通庸であり、三島による一連の施策により、庄内地区的市街地が発展していく。三島は道路等のインフラ

整備に加え、街区建設にも近代的な要素を取り入れることを推進した。この施策が庄内地区における街区発展の礎となった。現在もこの名残を残す建築物が残されており、願心寺本堂は明治期、願心寺山門は大正期に建築されており、国登録有形文化財として登録されている。平成30年（2018）には、新たに「旧持永邸住宅隠居棟」並びに「旧持永邸住宅門及び石垣」が国登録有形文化財に登録された。

このほか、城の北側には明治34年（1901）に完成した前田用水路がある。庄内川上流の閑之尾瀬より取水し、下流の谷頭台地への送水のため7kmにわたって建設されたもので、現在も利用されている。

### 第3節 安永城跡の沿革と各曲輪の概要

安永城跡は、応仁2年（1468）、北郷（都城島津）氏6代北郷敏久（1430～1500）の築城とされ、室町時代中期に成立している。北郷氏が都城盆地を支配するようになってからは、都島町に所在する都（之）城を本城とした同氏の支城としての役割を果たしていく。安永城には、実際の城番としては、北郷氏が所領替えとなる文禄4年（1595）頃まで北郷氏から分かれた源左衛門が代々城主として配置されていた。

北郷氏の薩摩宮之城町封後、伊集院氏が都城盆地を治めた時期は同氏の臣家が在城していたようである。いわゆる「庄内の乱」（1599～1600）勃発時には伊集院方の居城となり、庄内十二外城のひとつとして島津本宗家方と対話ししている。同乱時には、伊集院方の重臣で軍師である白石永仙が籠城し、同城の守備にあたっている。また、ここから出撃し、島津軍を悩ませている。なお、同乱時には、安永城周辺（中霧島、小松尾、鶴ノ島等）において戦闘が生じたとの記録も残されているものの、城内で戦闘が生じたとの記録は無い。

安永城は、庄内の亂収束後、北郷氏が都城に復した後、1615年の元和一国一城令に廢城となるまでは機能していたものと考えられている。江戸時代を通じて庄内地域は引き継ぎ、北郷（都城島津）家の所領として存続し、廢城後、城の麓には同家の在地支配拠点となる安永地頭仮屋が置かれ、安永地頭の在番所となる。この仮屋を中心として近世集落は展開している。

以上が安永城跡の沿革であるが、城の構造を示す史料としては、都城島津家に伝来する安永城跡の古絵図（第3図、以下「古絵図」）がまず挙げられる。江戸時代に描かれたものと考えられており、ややデフォルメして描かれているものの、曲輪の配置は正確に表現されている。

また、安永城跡における考古学的な調査は、平成3年（1991）に八巻孝夫氏により縄張り図が作成され、初めて各曲輪に残存する城郭遺構の状況が視覚化されたことが嘴

矢となる（第2、4図）。八巻氏によれば、はじめ本丸（内城）、金石城が築城され、後に二之丸、取添が築かれ現在の状態になったとされ、最終的な整備の契機を庄内の乱に求めている（八巻1992）。

その後、これまで各種開発行為等に伴って、行政目的の確認調査、本発掘調査等の文化財保護措置が講じられてきている。現在までに一部消滅したものもあるが、各曲輪の概要についてまとめると以下の通りとなる。

**本丸（内城跡）** これまで本発掘調査は実施されていないが、平成17年（2005）に公園造成に伴い確認調査が実施されている。調査結果は公表されていないが、虎口と思われる溝状造構や、硬化面を伴う道路状造構、道路状造構の両側に設けられた軽石積造構等が検出されており、規模の大きな造構が残存していることが明らかとなっている。部分的な調査ではあるが、曲輪内部における区画の一部が明らかとなった点、また、16世紀代の遺物も多数出土しており、地鎮用に埋納されたと見られる朱書輪宝墨書き土器が出土していることが特筆される。

また、本丸西側の地点、曲輪の裾付近では、平成5年（1993）に市道拡幅に伴って本発掘調査を実施しているが、調査結果の詳細については不明である。

**二之丸** 安永城を構成する主要曲輪の内、最も広大な面積（約3ha）を擁している。昭和50年代に実施されたとされる耕地整理により大きく改変されており、実際事前の確認調査でも確認されたように、本来の堆積土層も大きく擾乱を受けていることが明らかとなっている。

今回の調査以前、平成13年（2001）に民間開発に伴い、確認調査を実施している。結果は前述の擾乱により造構・遺物は確認されず、その後の工事削平により一部が失われている。そのため曲輪西端付近は削失しており、曲輪本来の形状は保たれていない。

なお、本丸と二之丸曲輪間に大型の空堀が存在しているが、これは大正初年（1912）、台地下に位置する庄内小学校校運動場工事に伴って行われた流し工事によって拡張され、現在の形状になったものとされる。

現存する造構の状況について見ると、曲輪北東部に虎口と思われる掘切が存在している。ここが二之丸への主要な進入口と思われ、現状において、確認できる虎口はこの1箇所のみである。ちなみに、「古絵図」（第3図）には二之丸内の虎口は描かれていない。虎口の南北には少なくとも2段の平坦面（腰曲輪）が存在しており、前方に空堀等がなく、段丘面が広がるこの面には重点的に防護構造を持たせているようである。

**金石城** 本丸の西に存在していた曲輪である。平成3年（1991）に民間の土砂採取事業に伴い本発掘調査を実施しており、曲輪の大半は調査後に工事削平され現存していない。

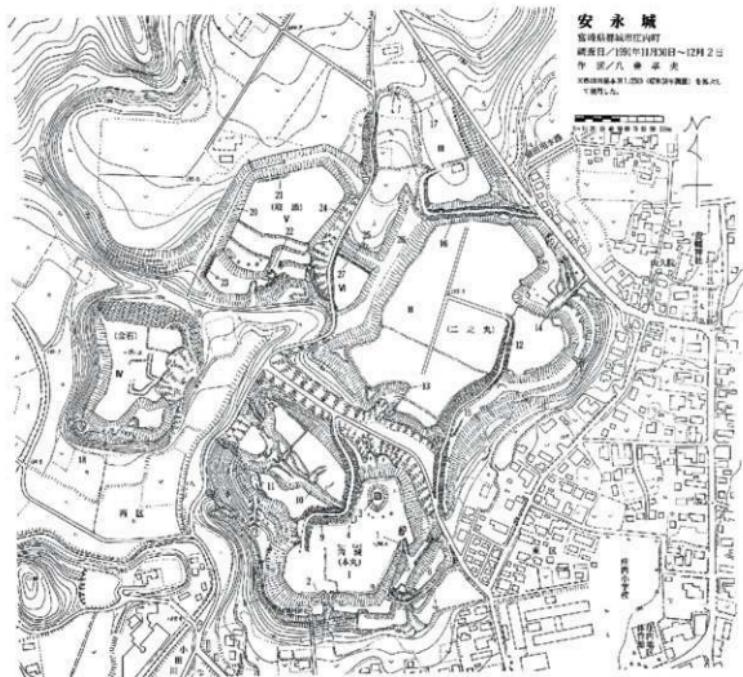
い。調査により曲輪内の様相がほぼ明らかとなっており、15世紀後半～16世紀前半を中心とした建物群、曲輪内部を走行する道路状造構等が検出されている。遺物は陶磁器類が大半を占め、土師器、銭貨、金属製品、金属加工関連遺物、漆片、炭化米等多岐にわたって出土している（都城市教委1992）。

**取添** 曲輪群の北西端に位置している。櫛張り調査によつて複数の平坦面および虎口状の造構が残存していることがわかっている。これまでに発掘調査は実施されていない。都城跡等、都城盆地における他の中世城館にも「取添」の名称をもつ曲輪は存在しており、この名称を持つ曲輪は、城郭最終段階に整備されたものと考えられている（重永1991）。

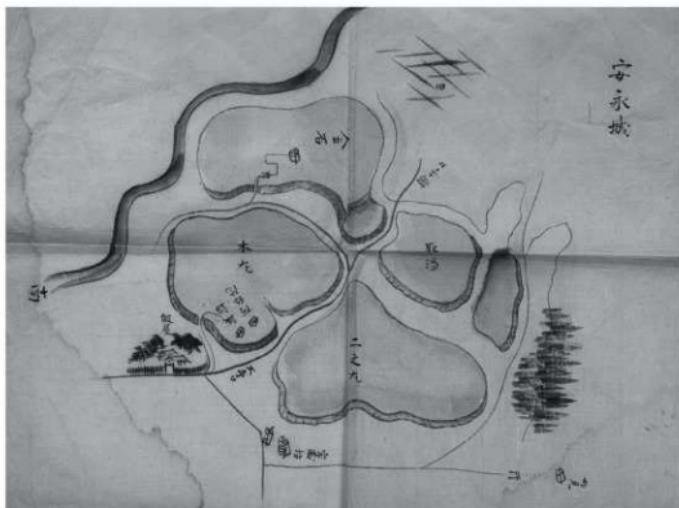
**遠堀（外堀）** 上記曲輪群の北約800m離れた位置にある空堀である。台地のくびれ部に設けられた空堀である。昭和49年（1975）までは完存していたとされるが、現在は埋め立てられている。規模は幅が10m程度、深さも堀底まで4～5mあったとされる。先述した曲輪群から離れた位置にあるものの、曲輪間を隔てるために掘削されたものではなく、安永城の立地する台地のくびれ部に設けられていることから、庄内の亂時に設けられた、北面からの敵進入を防ぐための防護施設として考えられている（八巻1992）。現在では、この範囲までが安永城の城域として認識されている。

#### 引用参考文献

- 重永卓蔵 1991「三、まとめ」「郡之城取添道路発掘調査概報」  
都城市文化財調査報告書（15）都城市教育委員会  
重永卓蔵 1992「中世の安永に関する文献に依る若干の考察」「金石城跡」  
都城市文化財調査報告書（19）都城市教育委員会  
都城市教育委員会 1992「金石城跡」都城市文化財調査報告書（19）  
都城市教育委員会 1999「大久保第2道路」都城市文化財調査報告書（48）  
都城市教育委員会 2004「都城市の中世城館（改訂版）」都城市文化財調査報告書（45）  
都城市教育委員会 2005「桑原道路」都城市文化財調査報告書（56）  
都城市教育委員会 2010「庄内小学校道路」都城市文化財調査報告書（100）  
都城市教育委員会 2014「都城市の文化財」  
都城市教育委員会 2017「庄内西脇道路」都城市文化財調査報告書（128）  
都城市教育委員会 2018「都城市内通路11」都城市文化財調査報告書（135）  
都城市史編さん委員会（編）2005「都城市史 通史編中世世紀」都城市  
都城市史編さん委員会（編）2006「都城市史 通史編近現代」都城市  
都城市史編さん委員会（編）2006「都城市史 資料編考古」都城市  
都城市立図書館 1981「庄内軍記」  
八巻孝夫 1992「安永城跡の櫛張調査」「金石城跡」都城市文化財調査報告書（19）



第2図 安永城跡縄張り図（都城市教委 2004より）



第3図 安永城古絵図 都城島津邸蔵



第4図 安永城全体図（都城市教委 2004 より）

### 第3章 調査の成果

#### 第1節 発掘調査の方法と概要

**確認調査の概要** 事前の確認調査は平成30年4月16日～5月1日、6月27日に実施した（実調査日数7日）。トレーニングは、二之丸曲輪内の西半部に計6カ所設定した（第5図・1T～6T）。それぞれ掘り下げて調査したところ、耕地整理による土層の擾乱は認められたものの、いずれのトレーニングからも安永城跡に伴うとみられる遺構が検出された。

検出遺構はすべて掘り下げず、一部の遺構掘削に留め、記録写真撮影、図化後に埋め戻した。各トレーニングの概要是以下の通りである。一部のトレーニングからは遺物も出土しているが、小片であった上、客土中から出土したものも多い。これらをピックアップした上で、章末（第12図）に掲載した。

1T（第6・12図） 繩張り図上で虎口状に窪む地形を呈する地点に設けたトレーニングで1m幅で南北に13m、東西8mの長さでL字状に設定した。表土以下の造成土直下にわずかに地山の黒色土が残存しており、これを掘り下げて御池軽石上面を遺構検出面として精査した。その結果、トレーニング東端からピット2基、北端から狭小な溝状遺構が1条検出された。検出遺構の状況からは、虎口もしくは通路と想定される様相は認められなかった。

1Tからは備前焼拂り鉢の口縁部（1）が出土した。

2T（第6・12図） 繩張り図上で段状の落ちが表現された位置に設けたトレーニングで1m幅で8mの長さで設定した。表土以下の造成土直下には御池軽石層が堆積しており、この面を遺構検出面として精査したところ、多数の柱穴と思われるピットが検出された。それらの一部を半裁、もしくは部分的な掘り下げに留め、遺構の全部は掘り下げなかつた。

2Tからは青磁後花皿口縁部（2）と粘土塊（3）が出土した。

3T（第6・12図） 曲輪の中央に設けたトレーニングで1m幅で12mの長さで設定した。土層の堆積は2Tと同様であり、遺構を精査したところ、やや大型の方形土坑1基、円形土坑1基、多数のピットが検出された。ここでも土坑のほかピットは半裁、部分的な掘り下げに留めた。このうち、方形土坑の遺構埋土には炭化物が多く混ざっていた。

3Tでは方形土坑より土師器壺口縁部（4）が出土した。

4T（第7図） 曲輪の北端付近に設けたトレーニングで1m幅で8mの長さで設定した。土層の堆積は2Tと同様であり、遺構を精査したところ、多数のピットが検出された。ここでも遺構は半裁、部分的な掘り下げに留めた。

遺物は出土していない。

5T（第6・12図） 曲輪の南端付近、1Tと2Tの間に設けたトレーニングで2×3mの規模で設定した。土層の堆積は2Tと同様であり、遺構を精査したところ、溝状遺構と思われる黒色土の落ち込みが検出された。部分的に掘り下げたところ、遺構断面は緩やかに落ち込んでいることが分かった。

遺構理土上位からは青花皿口縁部小片（5）、常滑燒甕（7、8）のほか、瓦質土器擂鉢の口縁部（9）、鉄釘（10）、チャート製の火打石（11）、砥石（12）、線刻の残る軽石製品（13）等が出土した。また、図化しなかつたが、披然した軽石がやまとまって出土した。

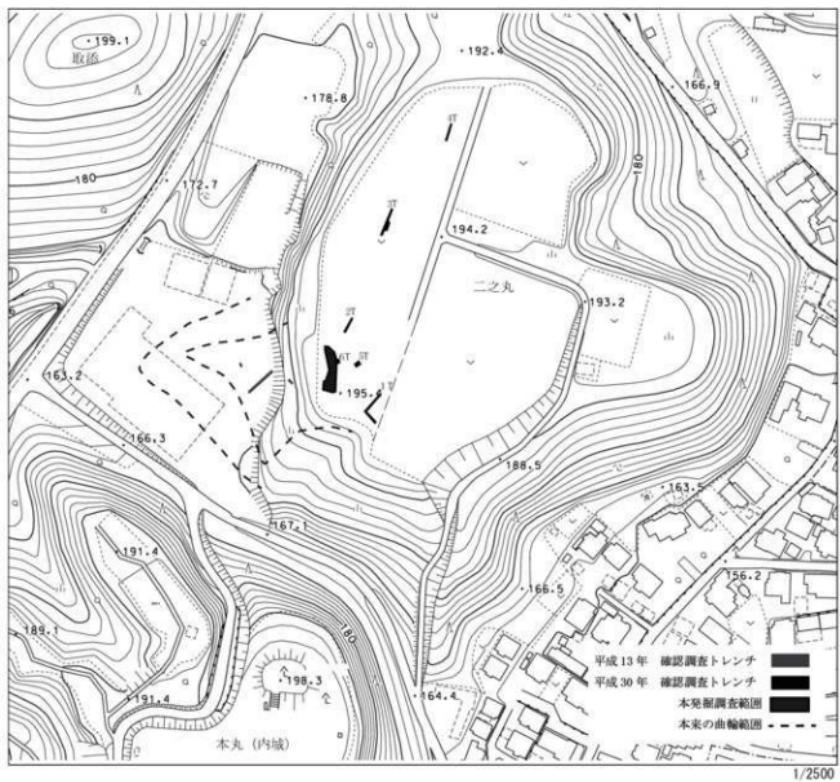
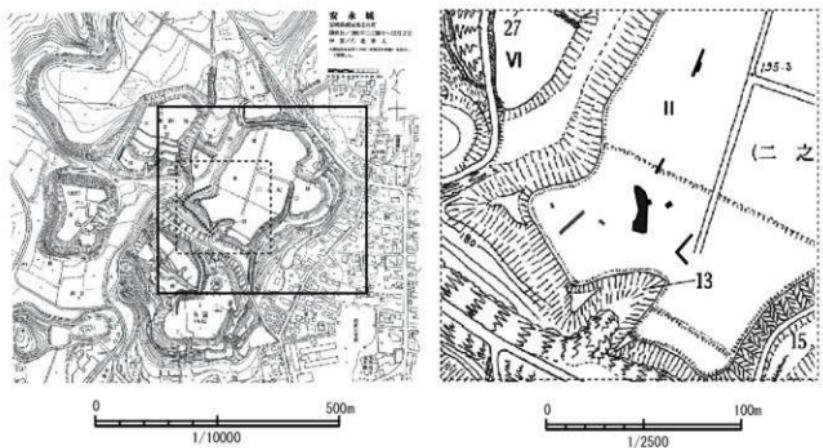
6T（第6図） 曲輪の西端付近、本発掘調査トレーニングに近い位置に設けたトレーニングで2×2mの規模で設定した。土層の堆積は2Tと同様であり、遺構を精査したところ、溝状遺構とピットを検出した。それぞれ部分的に掘り下げたところ、溝状遺構からは近現代の陶器が出土し、後代のものであることが分かった。

**本発掘調査の概要** 本発掘調査は牛舎建設に伴う崖地後退線が確定した後、トレーニングを設定した。調査地点付近は崖地となっており、この範囲を全面調査することは危険を伴った。そのため、調査中の安全を確保するために崖際から2～3m程度安全帯を設け、セットバックした位置に調査区を設定した（第5図）。調査面積は98m<sup>2</sup>である。なお、調査区が狭小だったため、グリッドによる区割り等は行っていない。

調査はまず、重機による表土剥ぎを実施し、表土及び造成土を除去し、遺構検出面となる御池軽石層まで露出させた。その後、作業員を投入し、調査区の整地後に遺構検出を行った。遺構検出面では、近現代の擾乱が一部及んでいたものの、調査区南半から中世の遺構がまとめて検出された（第9図）。特に掘立柱建物跡の柱穴跡と思われるピットがやや密度の高い状態で検出された。これらの配置を検討したが、建物としての規則性は見出しづく、最終的には2棟の掘立柱建物跡を検出したのみである。

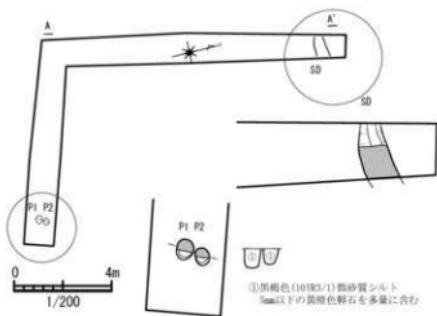
この他に、土坑が1基検出された。遺構の半分程度は調査区外へと延びており、掘り下げたところ、検出面から25mの深さまで掘り込まれており、大型の遺構であることが判明した。

上記検出遺構は断面図作成後に完掘し、完掘状況の写真撮影を行った。その上でスケール1/20の遺構図を作成し調査は終了した。

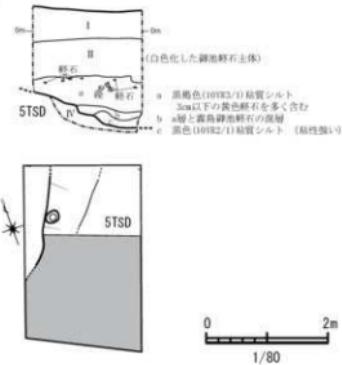


第5図 安永城トレント配置図（上段：縄張り図 下段：現況図）（S=1/2,500 1/10,000）

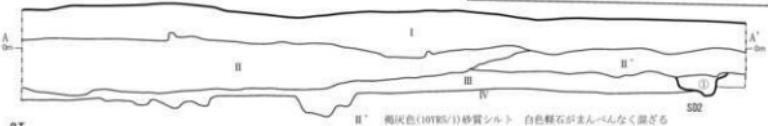
1T



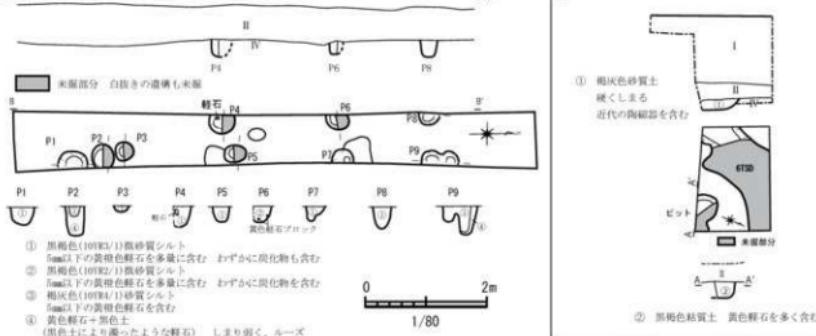
5T



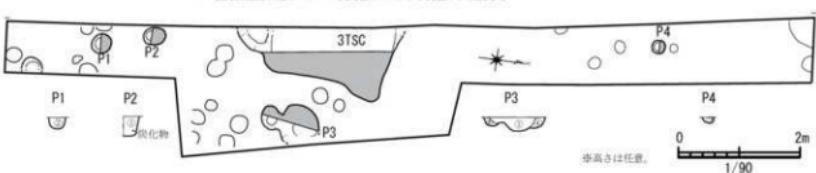
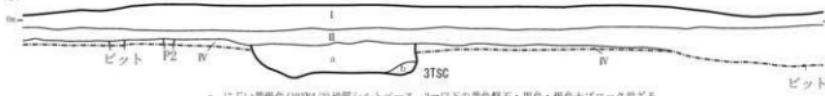
2T



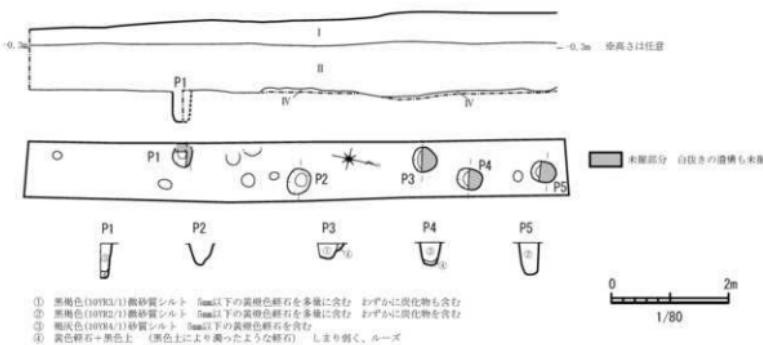
6T



3T



第6図 確認調査トレンチ平面図(S=1/80・1/90・1/200)



第7図 確認調査トレーニング断面図② (S=1/80)

## 第2節 基本土層（第8図）

先述した通り、二之丸は土層が大きく擾乱を受けていた。本来遺物包含層を形成していたとみられる土層は削失しており、確認調査時に検出された土層も併せると下記の通りである。

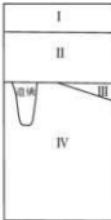
I層は、褐灰色（10YR4/1）砂質土である。現耕作土で表土である。

II層は、黒褐色（10YR3/1）砂質土をベースとして、白色化した御池軽石、黒色粘質土ブロックが混じる。昭和50年代に実施された耕地整理に伴う土層である。

III層は黒褐色（10YR3/1）粘質土である。霧島御池軽石への漸移層である。II層による擾乱により調査したエリアの大半において、残存していないが、確認調査1Tで検出されていることから、この付近には堆積しているものと考えられる。

IV層は霧島御池軽石である。約4200年前に霧島御池火口から噴出したテフラである。今回の調査地点では、約23mの層厚が認められる。平均径2、3cm程度の軽石で下位には径5cm程度のものが混じる。なお、同層が今回調査の遺構検出面となる。

今回の調査で検出された中世遺構の埋土はいずれも黒褐色を呈するものである。調査地点付近において、このような土層は通常、III層の上位にみられるものであることから、埋土の元となる地山層は耕地整理により、完全に消失しているものと判断できた。



第8図 土層模式図 (S=1/60)

## 第3節 中世の遺構と遺物

本発掘調査で検出された中世に相当する遺構は、掘立柱建物跡2棟、土坑1基、ピット40基である（第9図）。遺構配置を見ると、ピットが調査区の南半に偏って分布しており、この付近に建物が多く構築されていたようである。調査区の中央にはやや大型の擾乱が入っており、遺構は検出されなかつたが、この範囲においては、深度の浅い遺構は消失している可能性もある。

調査区南半で検出されたピット群は、すべて完掘した。柱穴の配列を見いだせたSB1、SB2の主軸方向が示すように、北西—南東方向に主軸を持つ建物跡（ピット列）が多いようである。SB1、SB2以外に柱穴の配列を見出すことはできなかった。

遺物は本来の包含層が失われていたことから、その出土量は非常に少ない。遺構内より少量出土しているほか、近現代の擾乱土坑や地盤横転跡からも出土しているのみである。以上のような状況ではあるが、出土遺物には、土師器、貿易陶器、国産陶器等が見られた。

### 3-1 挖立柱建物跡 (SB)

SB1（第10図） 調査区の南半で検出された。検出された限り、2間×2間の建物跡であるが、調査区外へと延びており、プランはこれ以上のものになると思われる。

主軸は北西—南東方向にある。柱穴の深さは最も深いもので検出面から0.5mで、最も浅いものは0.1mである。遺構埋土は、黒褐色土が單一で堆積していた。

遺物は出土していない。

SB2（第10・12図） 調査区の南半、壁際に近い位置で検出された。検出された限り、1間×3間の建物跡であるが、調査区外へと延びており、プランはこれ以上のものになると思われる。

主軸は北西—南東方向あり、SB1とはほぼ同一の主軸方向を示す。柱穴の深さは最も深いものが検出面から0.5mで、最も浅いものは0.3mである。一部の柱穴は平面形が橢円形状になり、且つ断面がオーバーハングし、いびつな形態を呈するものがあった。これは柱抜き取り等の人为的な影響によるものと推測される。遺構埋土は黒褐色土が堆積していた。

また、南西端の柱穴内からは柱の根固めに使用したと思われる軽石礫が検出されている。

遺物は埋土中より青花と火打石が出土している。14は青花皿の口縁部である。口縁は端反りとなる。外面には花文と思われる文様があり、内面には圓線が認められる。焼成は良くない。15は灰白色のチャート剥片を素材とした火打石である。側縁にわずかながら使用痕が残されている。

### 3-2 土坑 (SC)

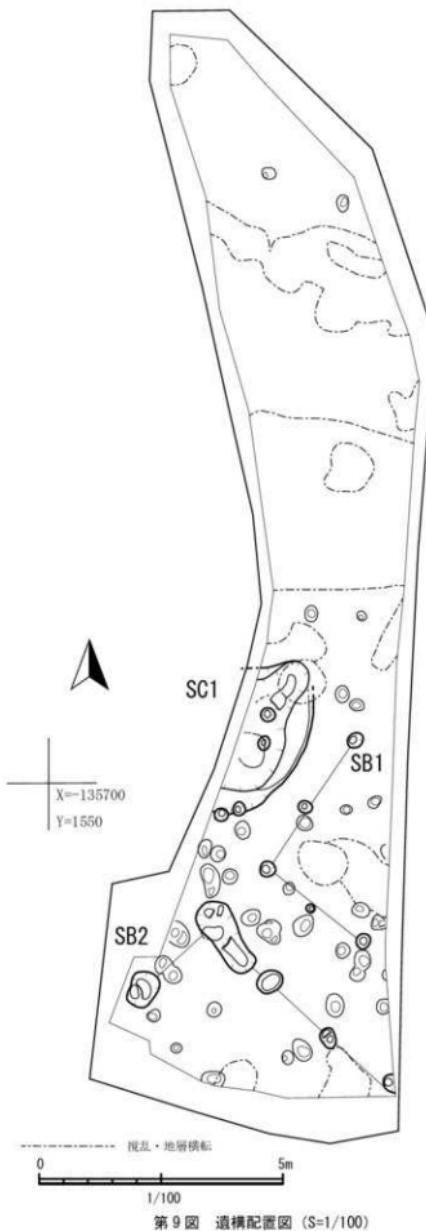
SC1（第11・12図） SC1は今回の調査区で検出された大型の土坑である。SC1上位ではピットが検出されており、これがSC1を切っている。また、遺構の一部は現代のイモ穴による搅乱を受けている。

遺構の一部は調査区外へと延びており、全形を把握できないが、平面形は橢円形を呈するものと思われ、その長軸は3.4mを測る。遺構の北東隅には一段の平坦面が見られ、階段状となっている。

遺構断面は逆台形を呈しており、床面付近ではオーバーハングしている箇所も見られた。遺構の深さは検出面から2.5mを測り、地山のIV層（御池軽石）、さらに下位の黒色粘質土を掘り抜き、その下位にある鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積層まで到達していた。

遺構埋土は複数に分けることができたが、その多くは地山のブロックが混じっているものであった。このことから、自然埋没ではなく人為的な埋戻しにより埋没したものと推定される。

遺物は遺構上位から被熱した軽石、粘土塊が出土し、中位から下位にかけては繩文土器のほか、磨製石斧が出土している。



第9図 遺構配置図 (S=1/100)

16は縄文土器の胴部と思われる小片である。胴部の下半と思われ、文様は見られない。17は粘土塊である。18は磨製石斧の柄部である。遺構の中位から出土した。刃部側は1/2程度欠損しているものと思われる。側縁には敲打痕が残っており、部分的に磨面がある。石材は安山岩を用いている。

19は上層から出土した軽石製品である。表面と背面が平坦に整形されている。表面の一部は被熱により赤色化している。

**3-3 ピット内出土遺物**（第12図） 握立柱建物跡以外のピットからの出土遺物はほとんどなかった。実測図化できたのは、20のみである。20は土師器壺の体部である。小片のため径を復元することはできなかつたが、口縁は直立気味に立ち上がる器形を呈するものと思われる。

#### 第4節 その他の遺物（第12図）

これまで報告してきたように、今回調査における出土遺物は少量である。ただし、調査区内における地層横断や搅乱坑からも遺物が出土したため、ここで報告する。搅乱からは近現代の遺物に混在する形で中世以前の遺物も含まれていた。

21は縄文土器の口縁部である。外反する器形を呈し、口

唇は平坦に仕上げられる。外面には2条の沈線状が横方向に巡らされている。内面にはわずかではあるがケズリが認められる。縄文時代後期の指宿式土器に該当する。22も縄文土器の口縁部である。外反する器形を呈し、口唇は平坦に仕上げられる。外面は強い工具ナダが横方向に巡り、浅い沈線状となっている。これ以外に文様は見られない。

23は搅乱から出土した白磁皿の口縁部である。わずかに端反りとなる。やや鉛色がかった釉が全体にかかる。森田勉氏分類（1982）のE群に相当するものと思われる。

24は搅乱から出土した青花碗の口縁部である。外面には○字文が認められ、内面には團線が見られる。小野正敏氏分類（1982）染付碗C群Ⅲ類に似る。25は近世の肥前系磁器碗と思われる。口縁端内面には釉剥ぎが見られる。外面にはモチーフは不明ながら文様が認められる。

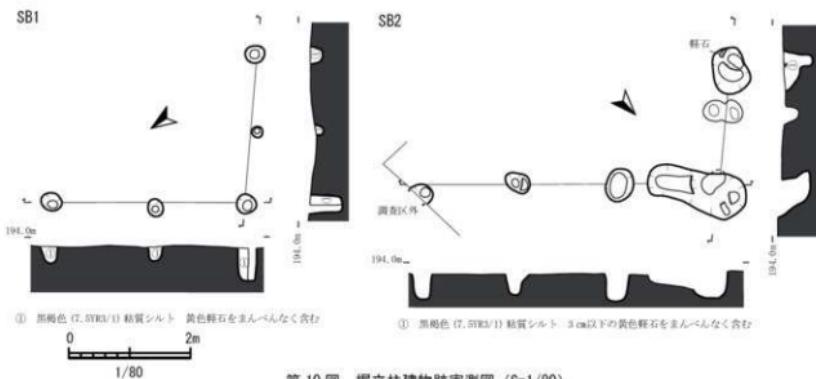
26は火縄銃の弾と思われる鉛製品である。搅乱から出土した。球状を呈するが、表面がわずかに平坦面を持つ。重量は3.4gを量る。一匁に相当することから小銃の弾丸と思われる。

第1表 遺物観察表（土器・土師器・陶磁器）

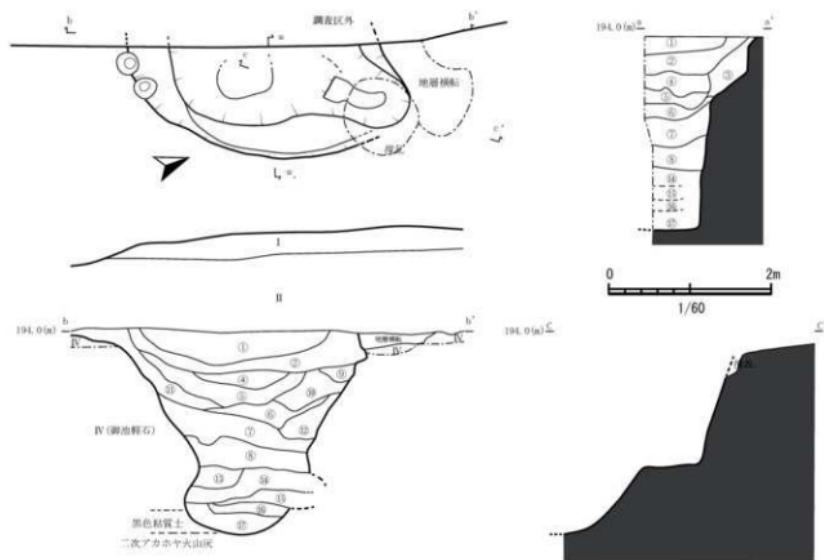
遺物番号	地区名	層	器種等	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	調整文様(内)	調整文様(外)	色調(内)	色調(外)	胎土等	備考	
3	1T	Ⅲ	縄錦	24.4			ロクロナデ	ロクロナデ	灰・灰・赤褐色(GYR5/4)	灰褐色(7SYR4/2)	白色・黄白色粒	纏向後	
2	2T	Ⅲ	黒				彫形 施釉	施釉	灰オリーブ(7SY5/2)	灰オリーブ(7SY5/2)	微小・心形粒	青磁	
4	3TSC		坪				ロクロナデ	ロクロナデ	灰白(10YR8/2)	灰白(10YR8/2)	黑色・暗褐色	土師器	
5	5TSD	a	黒				團線	團線 文様			微小・黑色粒	青花	
6	5T	Ⅲ	黒				團線	文様			微小・黑色粒	青花	
7	5TSD	a	黒				ナデ	ナデ	相原(7SYR5/1)	灰白(2SY7/1)	白色・深褐色粒	青磁燒	
8	5TSD	a	黒				ナデ	ケズリ・ナデ				當滑後	
9	5TSD	a	縄錦	27.0			接目ロクロナデ	灰(5S-0)	灰(5S-0)		白色・黑色粒	瓦質土器	
14	SB2	上層	黒				團線	丸文か 団線			微細黑色粒	青花	
16	SC1	下層	坪				ナデ	ナデ	浅黃褐(10YR8/4)	にじむ黄褐(10YR7/4)	白色・黑色粒	繩文土器	
20	ピット	上層	坪				ロクロナデ	ロクロナデ	浅黃褐(7SYR8/6)	浅黃褐(7SYR8/6)	白色粒	土師器	
21	横丸		坪				ナデ	ナデ	沈継	泡(7SYR6/6)	明褐(7SYR5/8)	白色・黑色粒	繩文土器
22	横丸		鉢				ナデ	ナデ	輕(5YR6/6)	赤褐(5YR4/6)	白色・黑色粒	繩文土器	
23	搅乱		鉢				施釉	施釉	灰白(2SY8/1)	灰白(2SY8/1)	微小黑色粒	白磁	
24	搅乱		鉢				團線	○丁字					
25	搅乱		鉢				釉剥ぎ	團線 文様			精良	白器	

第2表 遺物観察表（石器・石製品・金属製品・土製品）

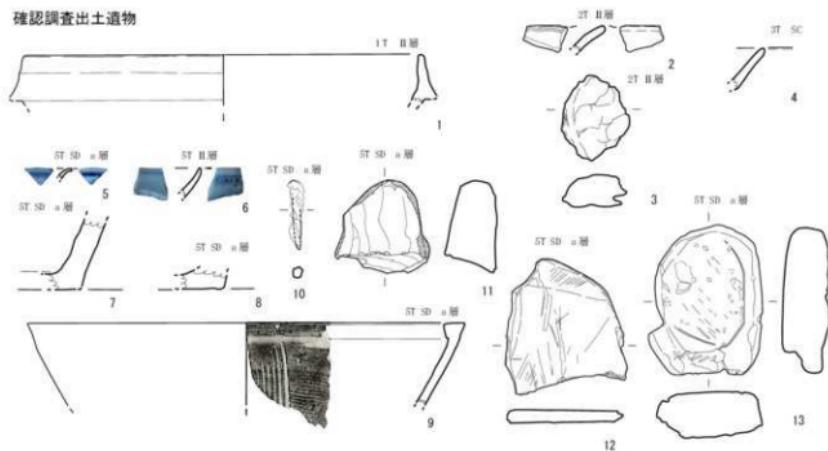
遺物番号	地区名	層	器種等	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石材・材質等	備考
3	2T	Ⅲ	粘土塊	5.3	4.2	2.0			
10	5TSD	a	鉄針	42	1.0	0.7		鉄	
11	5TSD	a	火打石	5.7	5.8	3.2	130.9	チャート(黒褐色)	原産面積寸
12	5TSD	a	砥石	8.3	7.5	0.8	81.5	頁岩	
13	5TSD	a	轉石製品	9.2	7.4	2.9	50.9	軽石	繩削あり
15	SB2	中層	火打石	2.6	2.3	1.2	8.9	チャート(灰白色)	
17	SC1	上層	粘土塊	3.9	2.2	2.0	14.2		
18	SC1	中層	磨製石斧	8.2	5.4	2.9	151.8	安山岩	
19	SC1	上層	轉石製品	12.4	12.4	8.5	357.0	軽石	一部被熱
26	搅乱		鉄弾	0.9	0.9	0.9	34	鉄	



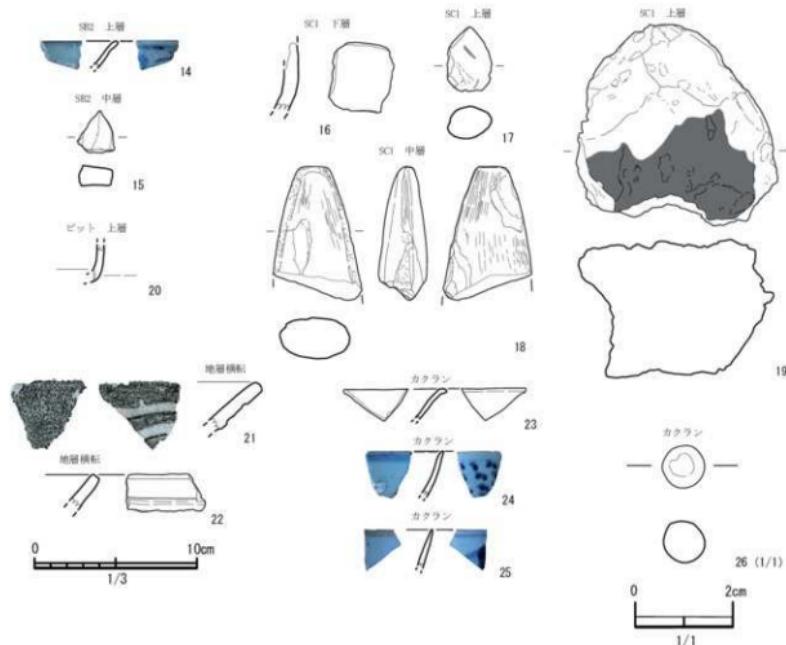
第10図 掘立柱建物跡実測図 (S=1/80)



確認調査出土遺物



本発掘調査出土遺物



第12図 安永城跡二之丸出土遺物 (S=1/3・1/1)

## 第4章 調査まとめ

最後に、今回の調査成果について簡単にまとめておきたいた。

まず、本発掘調査前に実施した確認調査の結果、二之丸曲輪内には、中世の遺構群が、残存状況が悪いながらも残っていることが明らかとなった。昭和50年代に実施された耕地整理による掘削は霧島御池軽石（IV層）上面に到達しているが、深度の深い遺構は未だ残存している。以上の状況は、確認調査を実施しなかった曲輪東半においても同様と思われ、今後もこれらの埋蔵文化財の取り扱いには注意が必要である。

確認調査では、複数のトレンチから土坑、溝状遺構、掘立柱建物跡の柱穴と思われるビットが検出された。ITを除くと、ほぼすべてのトレンチで遺構がまとまって検出されており、曲輪内全面において相当数の建物が構築されていたことが推測される。

また、5Tではやや規模の大きい溝状遺構（5TSD）が検出された。これは、金石城跡でも検出されているような、曲輪内における道路、もしくは区画溝である可能性が高く、二之丸曲輪内も区画されたいくつかのユニットを持つことを示唆している。ちなみに5Tで検出された溝状遺構の延長線上に本発掘調査区があるが、ここでは同遺構の統一と思われるものは検出されなかった。このことから、5Tと本発掘調査区の間で屈曲、もしくは収束している可能性がある。

現在は耕地整理により平坦化している曲輪内ではあるが、耕地整理以前のものとみられる昭和40年の空中写真（写真図版1）を見ると、曲輪内に現在よりも明らかに多い畠の区画が確認できる。これが曲輪内における区画の名残を示すかは不明であるが、微小な高低差等が存在していたことだけは間違いないようである。

次に本発掘調査の成果についてであるが、今回調査した地点は本来、曲輪の西端よりも内側のやや奥まった位置に該当する（第5図）。一部擾乱を受けており、遺構が消失している可能性のある場所も見られたが、調査区の南半を中心として、掘立柱建物跡の柱穴が多数検出された。調査区が狭小だったことから、すべての配列を把握することはできなかったが、北西—南東方向に主軸を持つものが多いようである。また、遺構密度の高さからもこの地点に繰り返し建物が構築された状況が伺える。柱穴の深度も検出面から0.2～0.8m程度と一樣ではなく、建物の規模も複数種のものが存在していた可能性が考えられる。

これらの柱穴に切られる形で検出された大型土坑（SC1）は、遺構内からは縄文時代遺物も出土しているが、遺構埋土の特徴から中世のものと判断した。用途は不明であるものの、このような中世城館曲輪内における大型土坑は都（之）城でも検出されており、曲輪内において何らかの目

的で振り込まれたものと考えられる。

確認調査、本発掘調査を通して出土遺物は少なく、遺構に直接伴う遺物もまた僅少であったことから、遺構群の時期比定には慎重にならねばならないが、擾乱等から出土した青花は概ね15～16世紀代の時期が大半である。加えて検出遺構の埋土には、桜島文明軽石（文明年間（1471年）が有力）桜島より噴出、通称「白ボラ」を含有するものが大半であった。安永城の築城年代が応仁2年（1468）とされており、このこととも整合的であるといえる。

調査で出土した遺物には、青花磁器以外に、日常容器として使用されたと思われる青磁、国産陶器では常滑焼、備前焼のほか、瓦質土器、土師器が見られた。

容器以外の遺物として、鉄釘、火繩銃の弾等の金属製品、砥石、火打石、軽石加工品等の石製品、粘土塊等も出土している。このように多岐にわたる遺物が出土することは、当市における他の中世城館（都（之）城、安永城（金石城）等）における発掘調査成果と同様であり、曲輪内で恒常的な生活が営まれていたことによるものである。

この他に、中世の遺物に混在して縄文時代後期の土器と石器も出土した。耕地整理により失われたものと推測されるが、御池軽石（IV層）上位には当該期の遺物包含層が存在していたものと思われる。ちなみに隣接する金石城跡の発掘調査でも当該期土器が出土していることから、遺跡はある程度の広がりを持っていることも考えられる。

また、近世の遺物も少量出土した。近世の安永城を描いた「古絵図」（第3図）には、本丸、金石城内に建物が描かれているものの、二之丸、取添には見当たらない。安永地頭仮屋からのルートも描かれておらず、曲輪内への往来も可能であったか不明であるが、これらの遺物は廃城後も何らかの利用があった可能性を示唆している。

以上のことから、今回の調査では、断片的ながらも城館が機能していた時期の遺構・遺物が検出され、曲輪内において明確な利用があったことを裏付ける貴重な成果が得られたといえる。

### 引用参考文献

- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会  
小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会  
重永卓郎 1992 「中世の安永に関する文献に依る若干の考察」『金石城跡』都城市文化財調査報告書 (19)  
都城市教育委員会 1992 『金石城跡』都城市文化財調査報告書 (19)  
都城市教育委員会 2010 『池之上城跡』都城市文化財調査報告書 (99)  
都城市史編さん委員会（編）2005 『都城市史 通史編中世後世』都城市  
都城市史編さん委員会（編）2006 『都城市史 資料編考古』都城市  
森田勉 1982 「14～16世紀の白磁の型式分類と年表」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会



調査区遠景（西側）



出典：国土地理院ウェブサイト (<https://mappo.gsi.go.jp>) 一部改変

安永城跡空中写真（昭和 40 年 ○が調査地点）

写真図版 2



確認トレンチ 2T (北から)



確認トレンチ 2T (南から)



調査区 (真上から)



調査地点（着手前）



土層堆積状況



SCI 検出状況（北から）

写真図版 4



SC1 埋土堆積状況



SC1 磨製石斧 (18) 出土状況



SB1 柱穴



SB2 青花 (14) 出土状況



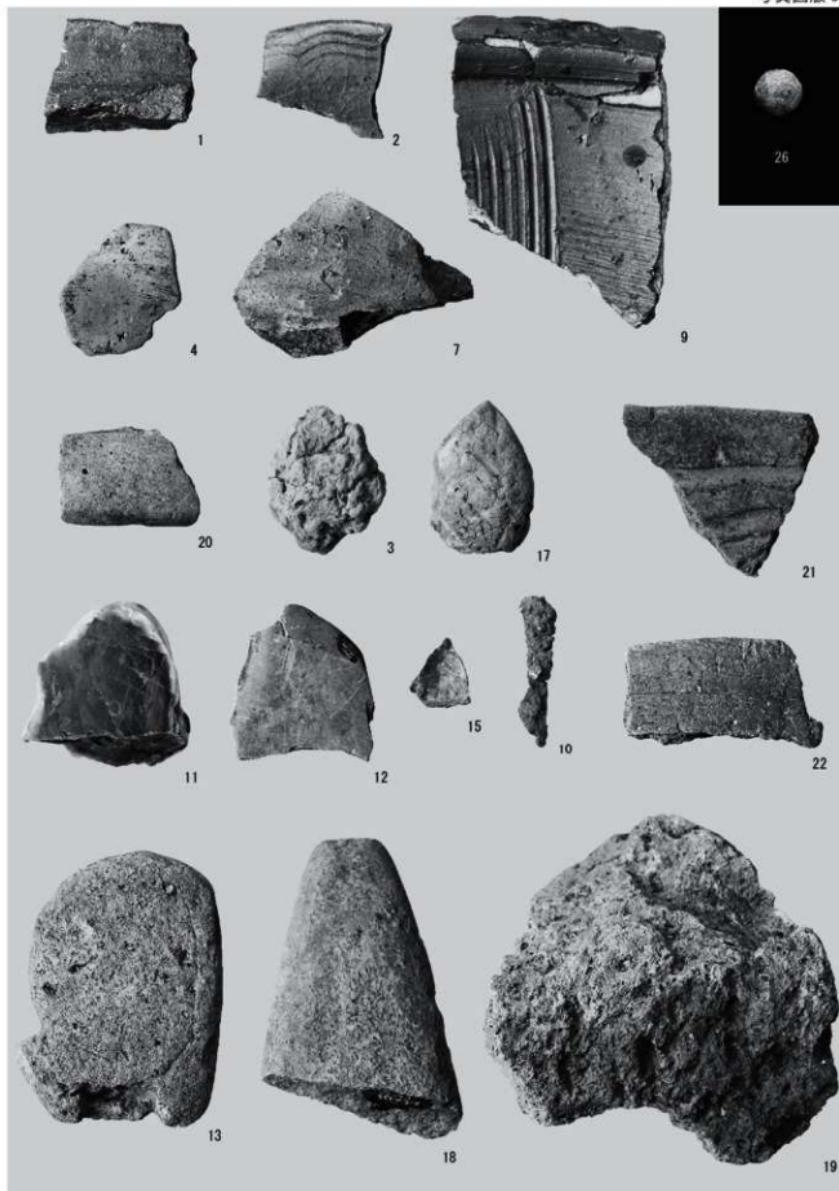
SC1 完掘状況 (北から)



SB2 内軽石出土状況



SB1 完掘状況 (西から)



## 報告書抄録

ふりがな	やすながじょうあとにのまる							
書名	安永城跡二之丸							
副書名	民間の牛舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	都城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第138集							
編著者名	加賀淳一							
編集機関	都城市教育委員会							
所在地	〒885-0034 宮崎県都城市菖蒲原町19-1 TEL 0986-23-9547 FAX 0986-23-9549							
発行年月日	2019年3月25日							
所取遺跡	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
安永城跡 二之丸	宮崎県 みやこのじょうし 都城市 庄内町	45202	M8047	31° 46' 35' 付近	131° 0' 59' 付近	H30.10.24 ～ H30.11.7	98m <sup>2</sup>	牛舎建設
遺跡名	種別	主な時代			主な遺構		主な遺物	特記事項
安永城跡 二之丸	城館跡	绳文時代 中世			掘立柱建物跡 土坑		土器・石器 陶磁器 土師器 石製品 金属製品	
要約	安永城跡は都城市庄内町に位置しており、庄内川左岸のシラス台地縁辺に作られた中世城館跡である。牛舎の建設に伴って二之丸の一部を発掘調査した。なお、二之丸の発掘調査は今回が初めてである。 調査の結果、中世の掘立柱建物跡、土坑、ピット等が検出されたほか、当該期の遺物も出土した。当該地は昭和50年代の耕地整理により変更を受けているものの、二之丸に伴う遺構が残存していることが明らかとなった。							

都城市文化財調査報告書第138集

## 安永城跡二之丸

—民間の牛舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成31年3月25日

編集 宮崎県都城市教育委員会 文化財課

発行 〒885-0034 宮崎県都城市菖蒲原町19-1

TEL (0986) 23-9547 FAX (0986) 23-9549

印刷 株式会社 都城印刷

〒885-0055 宮崎県都城市早鈴町1618番地

TEL (0986) 22-4392 FAX (0986) 22-4891







安永城跡二之丸

—民間の牛舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

二〇一九年